

日本比較文化学会・中部支部ニュース

第 10 号

2017 年 5 月 6 日発行

2016（平成 28）年度 中部支部 総会報告

（中部支部長：澤田 敬人）

2016（平成 28）年度の中部支部総会は、日本比較文化学会中部支部平成 28 年度例会（椋山女学園大学文化情報学部，2017.3.26）にて開催されました。以下、簡単に議事を報告します。

○報告事項

1. 中部支部会員数について

澤田支部長が 31 名（平成 29 年 3 月 25 日現在）であると報告した。

○審議事項

1. 平成 29 年度事業計画

澤田支部長が 3 件の事業計画を提案し異議なく承認された。

- ・ 5 月 20 日（土）に第 39 回全国大会・2017 年度国際学術大会を開催（中部支部が担当支部）。
- ・ 例年 9 月ごろに開催する中部支部大会は予定せず、平成 30 年 3 月ごろに例会・総会を開催する。平成 29 年度の例会・総会の会場は、改めて探す必要がある。
- ・ 中部支部ニュースの発行について、前年度の会計報告、前年度の支部大会・例会の報告、新年度事業計画をお知らせする媒体として、例年 5 月ごろ発行する中部支部ニュースのみにニュースレターの役割を集中させる。年 2 度の発行を 1 度とする。

2. 第 39 回全国大会・2017 年度国際学術大会の準備状況について

澤田支部長が準備状況を説明し承認された。

- ・ シンポジウムパネリスト（4 名および司会者）が確定した。本年度は韓国日本文化学会からパネリストを派遣できないとの申し出があった。韓国にあてた時間を議論の時間とすることになった。
- ・ 自由研究発表の申し込みを締め切った。司会者を 18 名選定する。抄録を作成する。

3. 編集委員会について

澤田支部長より提案があり承認された。

- ・ 学会の編集委員会（5 月 19 日）に白鳥副支部長が出席する。委員会での審議内容について後日ご報告いただく。

その他の事項 中部支部のこれから

澤田支部長より中部支部の将来構想について発言が求められた。澤田支部長から中部支部が編集担当となることを推進したいとの発言があった。

平成28年度 日本比較文化学会中部支部 会計報告書

自：平成28年4月1日 至：平成29年3月31日

(単位：円)

支出の部			収入の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
会場使用料 H28/9/25 あざれあ	4,300	H28/10/12	前年度繰越金	44,549	
会場使用料 H29/3/26 椋山女学園大学	1,400	H29/3/31	補助金	10,000	H28/9/23 本部より送 金
次年度繰越金	48,849				H29/4/19 手持ちの現 金(19,650 円)を銀行 口座に預け 入れ
合計	54,549		合計	54,549	

(※摘要の日付は銀行取引日)

以上のとおり報告いたします。

平成29年4月20日

会計 澤田敬人 会計 津村公博

平成28年度 日本比較文化学会中部支部 監査報告書

平成28年度会計の収支決算について監査の結果、報告の通り相違ありません。

平成29年4月25日

監査 安藤雅之

2016（平成28）年度 中部支部 第9回大会報告

2016年9月25日（日）、静岡県男女共同参画センター「あざれあ」において第9回大会が開催されました。以下、発表要旨を掲載いたします。（※敬称略）

○自由研究発表（一人発表20分＋質疑応答10分）

オーストラリア高等教育政策におけるオーストラリアンスタディーズ －新連邦主義と新自由主義のはざまのナショナリズム－

澤田敬人（静岡県立大学）

本研究の射程：1980年代オーストラリア高等教育政策の3分割

本研究ではオーストラリアにおいて1987年以降のジョン・ドーキンズ連邦雇用教育訓練大臣が主導する教育改革の直前期に同じくボブ・ホーク（Bob Hawke）労働党政権下で高等教育行政を担ったスーザン・ライアン（Susan Ryan）教育青少年問題大臣の政策を検討する。とりわけライアン大臣は1988年のオーストラリア建国（入植）200周年を記念する行事との関連から高等教育レベルでのオーストラリアンスタディーズの導入を政策として進めた。他にもライアンは従来からの労働党の政策である社会経済下層の高等教育参加を政策として踏襲している。本研究ではホーク労働党政権の直前のマルコム・フレーザー（Malcolm Fraser）自由党政権による連邦政府機能検討委員会（別名カミソリギャング）の高等教育改革の時期である1981年から1983年、またジョン・ドーキンが主導した高等教育全国一元制の制定時期である1987年以降のはざまにあるスーザン・ライアンの教育政策の特異性を論じる。

参加を促す高等教育カリキュラムとオーストラリアンスタディーズのナショナリズム

高等教育レベルのオーストラリアンスタディーズを導入するにあたっては、大学知識人が考えるオーストラリアンスタディーズとは異なる政治家の信条が大きく作用しており、そこにはオーストラリアの植民地ナショナリズムの典型的な発露が見て取れる。ライアンは大臣就任当時よりオーストラリアの高等教育の問題として社会経済的下層の参加の程度が低いことを指摘してきた。高等教育への参加の程度が低いことの原因を高等教育の提供者がその階層に参加意欲を与えなかったことに求めている。まず高等教育へ参加する先住民の学生の割り当てを増大させるという政策を実施した。次に1988年の建国（入植）200周年を記念する行事と関連付けて高等教育レベルでのオーストラリアンスタディーズを導入させた。国民文化の一元化に傾く可能性があるが、ライアンは当初から先住民の歴史を重視する文化の複数性を前提とした。オーストラリアでは共和主義的な傾向のあるときのナショナリズムは、イギリスの過去の植民地主義的支配からの脱却とオーストラリアの独自性を同時に主張する傾向がある。

国際化社会に生きる青少年の共生を目指した教材モデルの開発に関する研究①

－3 ヵ年計画の検証を中心に－

白鳥絢也（常葉大学）・津村公博（浜松学院大学）・澤田敬人（静岡県立大学）

本研究は、わが国の公立学校に多数在籍する南米日系人児童生徒の自律的な学習を促進し、且つ多様な学力レベルや学習ニーズ、学習目標にも個別に対応できる教材モデル（主としてブラジル本国で使用されている教科書の分析とその実用化を目指した実践）を構築し、その効果を評価しながら、彼らの学習社会への参加を促す教育方法について、学問的・実践的な観点から知見を得る。具体的には、ブラジルの教科書を分析して、日本の子どもとブラジルの子どもと共通のテーマ・内容を掘り起し「共生」に役立てようとするものであり、日本の公立小学校の中で、両者が相互理解するための教材モデル（学習材）を構築することを研究のスタートにして、ユニバーサルデザイン教材の作成までを射程に入れる。

第一年度は、まず外国人児童生徒教育に関する先行研究を改めて詳細に吟味し、その特徴・問題点を指摘する。後半から、選択したブラジルの教科書（小学校国語・社会，小学校1～4年生）を分析し、日本の子どもとブラジルの子ども両者の多文化共生を助長する教材モデルを抽出し、次いでその妥当性の検証を開始するとともに、一部小学校において実践する。

第二年度は、まず異文化理解の前提としてのブラジル現地の社会や生活、教育の環境等の史的変遷について、実態がどうであったかを文献により調査する。その際、主としてブラジルの学校のカリキュラムと教科内容に注目する。次いで、静岡県浜松市に在住しているブラジル人児童の学習・生活の実態を調査・検討する。（教育委員会や小学校、在日ブラジル人学校を訪問予定）後半から、抽出された教材モデルの修正を行い、改めて一部小学校において実践する。

第三年度は、一・二年度に行った理論的・実践的研究に基づき、日本の子どもとブラジルの子ども両者のための教材モデルの開発について、わが国の学校での実践を視野に入れた独自の研究を完成させる。

外国人児童生徒教育の研究でこのように「教材」に焦点を絞り、しかも南米日系人の子ども・日本の子ども両者への適用を目指したものは皆無であり、研究・実践・行政の三者に役立つものと確信している。

カンボジアの小学校教員養成カリキュラムに関する考察

安藤雅之（常葉大学）

カンボジアでは「強靱な能力と健康を保持し、職業意識が高く、社会倫理と徳を備えた両性の教員を養成し、政府の国家教育目標に即した質の高い教育の発展に寄与」することを教員養成の目的としている。そして2年後の養成後には①全教科に対する知識と専門性を備えている、②教育、教授、管理能力を持ち、日常的に自主研究を行う、③高い倫理と徳をもち、他人と共生できる、④地域活動を通じて、地域と国の発展に参画する精神を備え、子供を学校に行かせることについて父母及び生徒に指導を行う、⑤第二の父母であり、医者や社会のアドバイザーであることが求められ、期待されている¹⁾。

現行の小学校教員養成カリキュラムは2010年12月に教育・青年・スポーツ省の教員養成教員養成課によって策定され『教員養成プログラム』として明示されている。

カリキュラムは年間44週(2年間で88週)のうち、新年度の準備期間、休業期間、復習及び試験準備期間を除いた年間36週(1年目：授業30週、教育実習6週、2年目：授業28週、教育実習8週)を実施することが定められている²⁾。授業は職業能力トレーニング<524時間(19.22%)>、基礎知識トレーニング<425時間(15.59%)>、小学校教育知識・指導法トレーニング<1209時間(44.37%)>の3種類のトレーニング及び教育学研究<16時間(0.58%)>、教育実習<552時間(20.24%)>の5つの領域から構成されており³⁾、カンボジアの文化や伝統、課題や問題を基盤に据えた特色を備えているが、教員養成の目的を達成するための教育内容や科目配置として整備されているとは言い難い。

今後、カンボジアにおいて計画されている4年制の教員養成大学の設置にあたって、教員養成カリキュラムの編成上の課題は、基盤となる「教養共通科目」群を充実させるとともに、教育の質的向上を目指す上で教科教育に関する指導の充実と改善が挙げられる。すなわち教科指導法の確立を図ることが、カンボジアの教員の指導力を向上させ、授業改善や子供の学業成績の向上につながると考える。しかし教育実習の現状や課題がほとんど『教員養成プログラム』からは解明できなかつたため、今後教育実習の実態をより明確にしていくことが本研究の課題である。

1) Teacher Training Department “Curriculum for Teacher Training Fundamental Primary Education 12+2” (英文翻訳本) 2011,p.4

2) Teacher Training Department 同上書, p.5.

3) Teacher Training Department 同上書, p.4.

日本比較文化学会 中部支部 平成 28 年度例会報告

2017 年 3 月 26 日（日）、椙山女学園大学文化情報学部において平成 28 年度例会が開催されました。以下、発表要旨を掲載いたします。（※敬称略）

【第1部】勉強会

『耳なし芳一の物語』を読む —小説と映画との比較を通して—

木田悟史（三重大学人文学部特任准教授）

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn）の「耳なし芳一の物語」（“The Story of Mimi-Nashi-Hōichi”）の読みどころの一つは、主人公が盲目の琵琶法師であるということ、つまり、ハーンが視覚を使わずにどのように物語を書いているかということであり、注意して読めば、芳一の聴覚や触覚によって彼が連れ込まれる異世界が巧みに描かれていることがわかる。もう一つこの作品を読む上で注意しなければならない点は、内容は日本の物語でありながらも、それが英語によって英語圏の読者に向けて書かれているという事実である。当然そこには日本語と英語とのずれが生じるが、それは必ずしも欠陥ではなく、「外国人」としてのハーンのまなざしを覗うことのできる重要な箇所である。

小林正樹監督による「耳無し芳一の話」は 1965 年公開の『怪談』中の一編である。ハーンの怪談 4 篇を集めたこのオムニバス映画は小林監督初のカラー映画で、その鮮烈な映像美は国内外の批評家から注目を集めた。「耳無し芳一の話」の美術はとりわけ絢爛で、観る者の記憶に焼きつく。目の見えない琵琶法師の物語が色にこだわって映画化されたという事実は、原作と比べる上でとても興味深い。

ハーンの “The Story of Mimi-Nashi-Hōichi” と映画「耳無し芳一の話」を比較し、それぞれの特徴や、両者の類似点、相違点を検討したい。

【第2部】自由研究発表（一人発表 20分＋質疑応答 10分）

国際化社会に生きる青少年の共生を目指した教材モデルの開発に関する研究② ーブラジルの教科書事情と内容分析を中心にー

白鳥絢也（常葉大学）・澤田敬人（静岡県立大学）・津村公博（浜松学院大学）

本研究は、ブラジル本国で使用されている教科書（主として国語・社会科）を分析し、日本の子どもとブラジルの子どもと共通的なテーマや内容を掘り起こし、「共生」に役立てようとするものである。また、日本の公立小学校の中で、両者が相互理解するための教材モデル（学習材）を構築することを研究のスタートにして、「ユニバーサルデザイン」教材の作成までを射程に入れたものである。

わが国の公立学校に多数在籍するブラジル籍児童生徒の自律的な学習を促進し、且つ多様な学力レベルや学習ニーズ、学習目標にも個別に対応できる教材モデル（主としてブラジルの教科書の分析とその実用化を目指した実践）を構築し、その効果を評価しながら、彼らの学習社会への参加を促す教育方法について、学問的・実践的な観点から知見を得ることを目指している。

本研究グループにおけるこれまでの先行研究の吟味から、①ブラジルの子どもが母語や母文化を学ぶための教材と、②日本の子どもが外国を中心とした多文化に接する教材が「同時」に求められていることの重要性を指摘した。また、教科書分析を通して、ブラジルの子どもたちは教科書から自国の実情を学び、さまざまな作業が盛り込まれた学習をしており、ブラジルの教育は自国の実情を正確に理解し、ブラジルで生きていくための判断力や行動力、問題解決能力等を身につけた人間を育てようとしているということが明らかとなった。ブラジルの教科書を日本の公立学校で活用することにより、ブラジルの子どもは母国の文化や社会を知ることができ、日本の子どもは彼らと同じレベルでもって外国の文化や社会を知ることができる。故に、両者にとって有効なものとなることが指摘できる。

※本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（平成 28-30 年度 基盤研究（C）「国際化社会に生きる青少年の共生を目指した教材モデルの開発に関する研究」課題番号：16K04561、研究代表者：白鳥絢也）の助成を受けて行われたものであり、ここに謹んで感謝の意を添えます。

武者小路実篤「新しき村」にみる地域社会と宗教との関わり

大崎洋（愛知学泉大学地域社会デザイン総合研究所）

地域社会には古くからの宗教施設（神社や寺院）が存在している。わが国では、地域や共同体の中心に神社や寺院の広い役割があった。しかし宗教施設や宗教者は、かつてのような地域社会のチカラになっていないのではないかという問題認識から、武者小路実篤「新しき村」を通して、筆者の住む名古屋市北部楠地区における宗教との関わりについて考察する。

大正9（1918）年、自他共生の理想郷をめざして武者小路実篤（1885~1976）とその同士により始められた農業協同集落「新しき村」は、古びているとはいえ、異なる他者を尊重し、他者から学び、そして互いに助け合おうという精神が息づく共同体である。

現在も「新しき村」は「東の村（埼玉県毛呂山町 本部）」と「西の村（宮崎県気城町）」の2ヶ所で実篤らがめざした理想社会を求めて活動が続けられている。特に、多様な価値観や文化が、急速な勢いで出会う今日の社会において、様々な宗教が存在する地域社会における寛容な宗教間対話を進める上で、大変参考になるものである。

楠地区は5学区（楠・味鉢・西味鉢・如意・楠西）で構成されており、宗教を取り巻く状況として、「地縁」や「血縁」が色濃く残っており、檀家や地域の人が神社や寺院を支えている。将来について、神社関係者の危機感は強いが、寺院関係者の「寺院消滅」といわれるような危機感はあまり感じられない。新宗教の施設は、創価学会の会館のみである。

一方、資本主義の進展の中で伝統的な社会システムは解体され、個人が共同体とは無縁な生活を送る状況が生まれてきている。多様な習慣や関心をもつ人々が、地域社会という民主的共同体のなかで共存するための方途について、宗教との関わりをソーシャル・キャピタル（アメリカの政治学者パットナムが2006年に世界的に普及させた用語。社会資本もしくは社会関係資本と訳され、（社会や他者への）信頼、互惠性の規範ネットワークの総体を示す概念。社会的なつながりのネットワーク、「共にする」こと。地域社会における経済活動・社会福祉・公衆衛生・市民活動・政治社会問題などへの取り組みの効果を上げるためにソーシャル・キャピタルの形成や活性化が重要と考えられる。）の視点からみた場合、宗教としての「新しき村」は、多くの示唆を与えてくれる。

カーソン・マッカラーズの『心は孤独な狩人』における不条理な展開 —エレン・グラスゴーの『不毛の大地』と比較して

岩塚さおり（名城大学）

南部出身の女性作家、Carson McCullers（カーソン・マッカラーズ）は、15歳の時に大病をして以来、病と闘い続け、寡作ながら、亡くなるまで音楽描写を用いて興味深い作品を生み出した。作品の多くに、音楽描写が登場するのは、マッカラーズが作家になる前、コンサートピアニストになるべく、ピアノを猛練習していたという伝記的な背景によるものであると見られている。1 本発表では、23歳の時に発表し、好評を博した長編デビュー作（Carr 97）、*The Heart Is a Lonely Hunter* (1940)（『心は孤独な狩人』）の場面展開に使われた音楽描写に着目する。

マッカラーズは、本作品執筆時、聾者シンガーを軸として、周囲に理解されない孤独な4人、ミック・ケリー、ビフ・ブラノン、コーブランド医師、ジェイク・ブランツの登場人物それぞれが、シンガーに胸の内を語り、親友と信じる関係が、音楽理論における対位法に即したものだと言っている(McCullers 159)。従って、これまでの先行論文においては、対位法で書かれたそれぞれの人物が、シンガーの自殺をきっかけに、一方的な友情であったことに気付くという結末から、本作品の主題は題名のごとく「愛と孤独な物語」であると解釈されて来た。しかし、語りの終結部については、それぞれが、孤独から立ち直り希望を見せている、と解釈する議論と、欺瞞に陥った登場人物の悲劇的な最後は絶望を意味するという議論とに大きく分かれている。2 確かに14歳のミックに焦点を当てると、『交響曲第3番』との出会いから大きな夢を描いたことは何か役に立つはずと、最後呟くことから、微かな希望が見え、ミックの成長物語であることを示唆していると解釈することは可能だ。しかし、Claire Lenvielが主張するように、自身の運命を変えようとしても、葛藤するだけだ(119)という実存主義の視点に立った見方も否定出来ない。

本発表では、まず、場面展開に使われたベートーヴェン『交響曲』の音楽描写の比較対象として、同じく南部出身のEllen Glasgow（エレン・グラスゴー）による*Barren Ground* (1925)（『不毛の大地』）の中で場面展開として使われたベートーヴェン、ピアノソナタ『熱情』（1805年）の描写を取り上げる。両作品の語りでは、共に場面展開として、ベートーヴェンが、同じ時期に作曲した作品の音楽描写が用いられているが、語りの展開は真逆であり、マッカラーズの主張をより明確にしていく。そして、『交響曲』の音楽描写からの場面展開を考察し、本作品においては、不条理を描き、絶望の結末を主張したことを検証していく。

註

1. カーソン・マッカラーズの批評家、Margaret B. McDowellは、“McCullers practiced the piano hard since she was a child in order to study at the Julliard School of Music and to become a concert pianist” (19)と述べ、マッカラーズの伝記作家、Virginia Spencer Carr

もまた、“Lula Carson Smith at thirteen knew without a doubt that she would be a concert pianist, a career that would fulfill a destiny created for her many years earlier by a confident and enterprising mother (26) と書いているように、マッカーラーズの音楽的背景を窺うことが出来る。そして、Janice Fuller は、“The Convention of Counterpoint and Fugue in *The Heart Is a Lonely Hunter*” の中で、“The Influence of music manifests itself in a number of ways in Carson McCullers’ s fiction” (55) と述べ、Virginia Spencer Carr もまた、“McCullers herself in a later life came to acknowledge her musical studies as the source of excellent ‘sense of form and structure’ admired by students of her fiction” (26) と述べているように、マッカーラーズの作家生活においていかに音楽が影響しているかを説いている。

2. Constance M. Perry は、“Carson McCullers’ s first novel, *The Hunter Is a Lonely Hunter* (1940), symbolizes her own story of growing up in the thirties as a Southern female prodigy” と述べ、マッカーラーズ自身の成長を物語としたと解釈し、また、Barbara A. Farrelly もまた、“The main characters in the *Heart* have won their freedom with the death of John Singer” (20) と述べている。重要な登場人物の中にミックも含まれていることから、ミックは、シンガーの死によって自由を獲得するという解釈となる。その一方で、Claire Leniviel は、“The main characters —Mick, Dr. Copeland, Blount, Biff and Singer himself— symbolize this mental journey of the tragic existential human dilemma, which starts hopefully but crumbles tragically into disenchanting sentience” (119) と、結末は悲劇性を持っていると述べる。

引用文献

Carr, Virginia Spencer. *The Lonely Hunter: A Biography of Carson McCullers*. London: Peter Owen, 1977. Print.

Fuller, Janice. “The Convention of Counterpoint and Fugue in *The Heart Is a Lonely Hunter*.” *Mississippi Quarterly* 41(1987):55-68. Print.

Farrelly, Barbara A. “*The Heart Is a Lonely Hunter: A Literary Symphony*.” *Pembroke Magazine* (1988): 16-23.

Glasgow, Ellen. *Barren Ground*. Orland: Harcourt Brace, 1985. Print.

Leniviel, Claire. “Hopeless Resistance: The Self-Look in McCullers’s *The Heart Is a Lonely Hunter*.” *A Quarterly Journal of Short Articles, Notes, and Reviews* 26 (2013): 115-120. Print.

McCullers, Carson. *The Heart Is a Lonely Hunter*. 1940. New York: Houghton Mifflin, 1967. Print.

---. “Outline of ‘the Mute.’” *The Mortgaged Heart*. 1971. Ed. Margarita G. Smith. New York: Penguin, 1975. Print.

McDowell, Margaret B. *Carson McCullers*. Boston: Twayne, 1980. Print.

Perry, M. Constance. “Carson McCullers and the Female ‘Wunderkind.’” *Southern Literary Journal*. 19 (1986): 36-45.

新聞見出しにおける格助詞「へ」と「に」に関する一考察

劉吉香（関西外国語大学大学院/中国・東北電力大学講師）

新聞の見出しは、少ない字数という制約の中で伝達力の高い文が求められ、通常の文と違う表現形式が多く見られる。見出しの字数は、基本字数 17 字の俳句より厳しい。その中でニュースの全容を要領よく伝える努力が必要。助詞の省略などはよく使われる手法であると言われている。助詞の省略が可能だが、省略しすぎると意味が通じなくなり、誤解を与えたりする可能性が高い。言い換えれば、新聞の見出しに現れる助詞はほとんど省略しにくい助詞である。

従来の研究は助詞の省略や文末だけを注目するものがほとんどである。本稿では文末だけではなく、文中に現れる格助詞「へ」と「に」の特徴をも探してみたい。本稿は、読売新聞社の 2014 年一年分の一面における 1479 本の主見出しを考察対象としているものである。その 1479 本の内、格助詞「へ」と「に」の出現数は、それぞれ 137 回と 180 回であった。そして新聞の見出しの文末に現れる格助詞「へ」と「に」の出現数はそれぞれ 92 回と 49 回であった。本稿では、格助詞「へ」と「に」の新聞の見出しに現れる位置によって、文末に現れる場合と文中に現れる場合に分けて、その格助詞「へ」と「に」のそれぞれの特徴を究明した。

新聞の見出しにおける「へ」と「に」の意味役割にはその前後に現れる語が関わっている。文末に現れる「へ」の使い方は通常の場合の「へ」の使い方と違って、ほとんど「動作性名詞＋へ」の形で現れ、未来性や予定性などを意味するものである。そして、文末だけでなく、文中であっても、そのような「へ」の特徴が働いている。これは新聞の見出しだからこそ持っている特徴と言える。

そして、文末に現れる「に」の使われ方としては、普通の場合によく使われている「場所名詞＋に」のような存在や移動の着点を表すものが文末に現れにくく、変化の結果を表すものがほとんどである。それに対して、文中に現れる「に」の使われ方としては、変化の結果だけではなく、その前後に現れる語や句の意味タイプによって違い、通常の文の使い方とあまり変わらない。

いわゆる「アーカイバル・ヘゲモニー」についての試論

樋口謙一郎（椋山女学園大学）

アーカイバル・ヘゲモニーについて、この概念を主唱する川島真は次のように説明する。「国家や行政の文書管理が行き届き、それを市民や歴史研究者に公開していくことが、歴史的な事実確認や歴史研究の発展につながり、それが国家の意思や行為を歴史叙述の中に位置づけていくことになるのではないか […] アメリカ、イギリスなどの諸国が内政、外政の歴史的な文書を多く公開することが、歴史叙述にアメリカやイギリス政府の目線を反映させていくことになり、逆に文書を管理、公開していかない国や政府は自らの有していた意思や行為を歴史的に位置づけにくくなる」（川島 2009）

すなわち、各国が「文書を整理、公開して多く研究者などに供することが歴史叙述などに影響する」のであり、特定の国の政府資料がより多く公開され、アクセスが可能となれば、その国が歴史叙述の国際的趨勢にも影響力を持つことになる、ということである。

実際、領土や歴史認識をめぐる問題が現実外交でも重要な課題となることの多い東アジアでは、各方の主張の妥当性を検証する上で歴史文書の検討は不可欠であり、その管理・公開の進展だけでなく、将来に記録を残すこともおおいに求められる。今日、多くのさまざまな分野の研究者が公文書を駆使した研究を推進しており、発表者の研究領域である韓国現代史でも、韓国、米国、日本の公文書に触れずに実証的な研究を行うことはもはやできない。

とはいえ、公文書に対する過度の依存には十分な注意が必要である。確かに、公文書は「基本的に政府の記録であり、客観的で信頼性が高い」。そして「私文書は個人の主観や記憶違いといった問題が避けがたく内在している」（細谷 2017）。だが、発表者の経験からは、この認識は、いわば「学界のアーカイバル・ヘゲモニー」の状況をもたらしかねず、この点に研究者はより慎重でなければならない。

以上の点を考える事例として、本発表では、軍政期南朝鮮および大韓民国成立初期の英語教科書を検討することで、言語政策を公文書にもとづいて考察することの意義と限界、そしていわゆる「アーカイバル・ヘゲモニー」の学術的な側面における問題点について論じたい。

参考文献

- 川島真（2009） 『歴史』をめぐるガバナンスと文書管理：東アジア歴史認識問題をめぐる『年報行政研究』（日本行政学会）第44号、109-123頁
- 細谷雄一（2017） 「公文書がいざなう歴史への旅、未来への思考」（座談会）、『東京人』2017年4月号、20-25頁

「中部支部」会員募集
中部支部大会『名古屋地区をはじめとする中部地方全域』
開催者募集

○「中部支部」会員を募集しております。みなさまのご協力をお願い申し上げます。

○今後も『名古屋地区をはじめとする中部地方全域』を範囲とし、中部支部大会を開催することを予定しております。つきましては、支部大会開催の意思がある方を募集致します。

中部支部をより充実・発展させていくために、是非ご協力いただきたく、お願い申し上げます。

開催を希望される方は、下記までご連絡下さい。お待ちしております。

○連絡先（中部支部長：澤田 敬人）：sawada@u-shizuoka-ken.ac.jp

○ 同（中部支部事務局長：川口 雅也）：kawaguchi@hgu.ac.jp

『中部支部ニュース』第10号
発行：日本比較文化学会中部支部